衣喰住之内家職幼繪解圖

凡世の中に衣喰住の三ッ
ありて是をするつ道具ありて其一つ
の住乃字ハ人々の住居する家なり
先其家を作らんとおもふ
者ハ棟梁請負する人に住居
體手のよきよふに相談をし
何程と以ふ間どりを極め
其上大工をよんで普請の繪図よ
仕様とりに振の書附をさせる図

應需 曜齋國輝画

衣喰住之内家職幼繪解ノ圖 第二

家を拵る木品のよしハ國々より出ると
雖ども先欅ハ日向 檜ハ尾州 栂ハ上野など
から出るをよしとする其外國々の處において
能き木品がある所に生る木品を撰ミ其所の山
方商人といふが山主より立木を買取
根切と唱る木こりが其木を切
たをし土臺柱にする

いろいろに用ひる形ち
寸間を木挽にひかせ
丈ばしよう
里へ出しの図

國輝画

衣喰住之内家職幼繪解之圖
第一
鍛冶鐵物ハ諸國
火之要心
曜斎國輝画
衣喰住之内家職幼繪解之圖
第二
國輝画

衣喰住之内家職幼繪解之圖
第四
衣喰住之内家職幼繪解之圖

衣喰住之内家職幼繪解之圖
第六
曜齋國輝画
衣喰住之内家職幼繪解之圖
第六
曜齋國輝画

衣喰住之内家職幼繪解之圖
第九
曜齋国輝
衣喰住之
内家職幼
繪解之図
第十
應需
國輝画

衣喰住之内家職幼繪解之圖
家根ふつふやね板といふを
杉を薄くへぎするをたば
ねて山方よりいづるなり
是を女竹とこれに
割て五六分くらいづゝ
にならべてきり鋲
鳩にてよくいり
たるを釘にて
家根屋が
ふく図
左官のこのべを作るには先こまへ竹を
いふ細き女竹と柱と柱との間にさき
丸竹へさしてそれへあらじ竹の割
たるをて藁縄といふへつくるなり。
○こまへつくる図
衣喰住之内家職幼繪解之圖
第十三
上棟とて大工の切組しある木
品を建るへともいふなり
杉丸太にて足場といふて打しかり
をまはし縄にて結ひ立をすへそれより
柱をたて梁をつけ其上へ小屋と
しつらく家根の形をとゝのへつくる図
曜斎國輝画

衣喰住之内家職幼繪解之圖
十五
○瓦師ハ家根
の損ずるをよく見
棟がハら谷がハら
巴瓦など入用
の品を見
はかりて
瓦屋より
引とれるかはら
うわ土を家根へ
のせ其上へならべ
高下なきように
かはらをきせるの圖
曜齋國輝
衣喰住之内家職幼繪解之圖
十六
瓦ハ荒木田といふ
土に水をまぜ幾度も
鍬にてよく切かへし能く
練たる土を瓦の形に
木にて作りたる臺の
上へ載せならとふり
竹箆にて能く
こしらへ是を乾し
かはかして夫より焼き
あげたる釜へ入これ
松の枝にて蒸
やきにする圖
瓦がま
窯の如し
曜齋國輝
○左の方煉瓦石を製造するところ

第八
第九
衣喰住之内家職幼繪解之圖
應需 國輝画
衣喰住之内家職幼繪解之圖
十八
十九
二十
曜斎國輝摹

此木梃ハ支ふる処と力を用ゆる処と両端に分ち其の中間に錘あれバ支ふる処に近づく下の圖ハ皆此理に基つけるなり
推ところの木梃を長くし荷物を輪に近寄て積ときハ力を勞すること少し
木梃にて荷物を動かすにハ梃の杖手を長くするに従ひ力を省くこと多し
此戸ハ蝶鉸にて支へ手前に力を用ゆ中の重みを動かすなり
此胡桃などを剋る道具ハ力を用ゆる所鋏と同様なれども彼ハ端にて働き此ハ中間にて働くなり
重物を木梃の中央にかけ之を荷ふときハ二人の力を用ゆること等し若一方に偏れバ物に近つく方多く力を費すべし

荷車に重物を積とき木を斜に横へその上に物を持せて轉うし揚るときハ労を省くなり車の高さと木の長さにより力を減ずること差別あり
圖の如く斜面形の上に物を轉うして引揚るときハ物の重さ減ずるなり
梯子の級ハ高配低きほど升り降り易くして労を省くなり

楔ハ斜面形の二ッ合体したるものにて木またハ岩等を劈き或ハ柱を起すに必用ル器なり其形薄きハ力を省き厚き程バ餘分の力を費すなり
大酒盃を二ッ重ね其上を壓ときハ外なる盃のみ破るゝも亦楔の理と同一なり

是ハ輪軸共に備るなり軸に縄を纒ひ其端に重物を懸輪にも亦縄を繞らし之を回轉すれハ重物軸に倚て揚るなり輪軸多けれバ力を省くこと愈多し其形状種くあり
輪なしと雖も軸に柄ある者ハ人以て之を動すときハ回轉すること輪に異ならず
軸上に木挺を挿み之に力を用ひ運行すれバ労少くして大なる重物を挽上るなり

木梃にて重き物を動すにハ梃を直くすれバ力を多く費し斜にすれバ力を省く又梃を支ふる所と力を用る所との相去る遠近に従ひ其動くこと差別あり

鋏刀の物を切るも亦木梃の理に基くなれバ力を用ゐる柄と物を挟む所と相隔る程切断の力強きものなり

二人の児童長き板の両端に乗るに身体の重き方に傾かずして身体の軽き方に傾くハ板を支ふる処偏なる故なり若し板の中心を支へ其両端に同量の物を載るときハ板平均して傾くことなし天秤等の器ハ皆この理に基つけるなり

螺旋ハ其頭を轉ずれバ壓力にて働くなり之に木杙を附て回轉すれバ力を省くこと最多し
螺旋ハ斜面形より成ものなり假へバ斜面形の紙を筆の管などに巻ときハ螺旋の形を現するなり

梯子の一端を地に支へ之を起すときハ労少しと
雖その力を用ゆる所梯子の中央以下にあるゆゑ
多く力を費すべし
此木挺ハ一端を
支へ一端に錘を
掛く力を用ゆる
所中間にあり支
点の方に近づく
なり下の図皆此
理なり
手前の螺旋にて
支へ其近き処に力
を用ゆ先の一端に
物を挟み働きを
なす
長き板の一端
を地に支へ一端
を器械に釣り
中央以下の
処を蹈み働き
をなすもの
なり

法國の亥爾満ハ棉花を治る機器を造らんと數年工夫を凝しゝが一夕女兒の髪を梳るに指まて引伸し長短を分ちたるを見て忽ちに悟り遂に造り出せしとぞ

法國の巴律西ハ其國にて磁器の粗あるを見て精品を作らんとて數度の經驗に度架椅子まても焚盡したれバ妻子ハ發狂せしと歎きしが遂に此火力によりて藥料始て燒付其功を成したるとぞ

英國の瓦徳ハ蒸氣機器を造出さんとて土瓶の口より出る湯氣の水と成るを見て一滴つゝ計り居たりしを叔母其無益の事ニ時を費すを嘖りしが遂ニ機関を發明し數多の功をあらハせり
比耳ハ女子多かりしが農隙ニハ布を織りけるが其布ニ花草を印する機器を造らんと心を苦むるうち錫鉛を交へ製せる碟の上ニ圖を畫くとて忽ち此機を發明し遂ニ大利を得たり

秩裏ハ以太利有名の画家なり
曾て曰多年恒久に耐る屡大題の
作り難き画を作るときハ心手慣
熟して後甚だ容易なるに至る他人ハ
其易きを見て従前の難きを知る
者少しと或人秩裏に半身の画
を嘱し十日にて成就したるを
幾許の金を報んやと問ふ曰く金百両なりと
答ふるつゝ十日の料にハ甚だ多しといへバ
秩裏曰我十日ハ三十年間学び得たる所なりといふ

英國の宅地烏徳ハ幼き時
疾を得て不具と成しが其
國の陶器の粗なるを憂ひ
数年工夫して精巧の品を
造り出し國の大益を成せり
或人之を譬て此人その疾ある
故に心を内に用ひて此術を
得たるなりといへり

英國の阿克来ハ紡棉機
を造らんと數年心を苦しめて
家貧くなりゆくを其妻其功を
なして徒に財を費すを憤り雛
形を打碎きけれど阿克来怒
りて婦を逐出しぬ其後機器
成就して大に富しとぞ

英國の阿克来ハ紡棉機を造らんと数年心を苦しめて家貧くなりしを其妻其功なくして徒に財を費すを憤り雛形を打砕きければ阿克来怒りて婦を逐出しぬ其後機器成就して大に冨しとぞ

英國の維廉李ハ一の少女を愛恋して數〻其家に往きしに常に襪を織りて顧ざりしこのば李ハあまりを憤り何如にもして彼の工業を妨んとて三年の間工夫し竟に新機械を造り出して大利を得しとなり

英國の維廉李八一の
少女を愛憐して數々
其家に往きしに常に
襪を織りて顧ざりし
このは李へはまを憤り何如
ふもして彼の工業を
妨げんとて三年の間
工夫し竟に新機械を
造り出して大利を
得しとなり
英國の我喜斯可土ハ綿帯
こゝ婦人の飾に用る網の如き物
を織る機器を造らんとして數度の
試驗に負しくなり其妻憂ひ歎
きーが一日シヨン欣然として一條の
網ある様なる物を持帰り婦にあたへ
ろち機器の成就ならしなり

凡そ藝業を學びて善を尽し妙を極むるに至るは
皆な許多の苦辛勉強にあり禮諾爾圖が曰書事に
長ぜんと欲せる者は其心を悉くこれに注ぎ晨起より
夜臥に至る迄他念あらざりしと是画學のみにあらず
他の藝業においても亦然り一藝に卓絶せんと志す
者は如何なる時をも論ぜず昼夜常に工夫を用ゐ
遊戯をなすべからず才は天より受るといへども
その業の成否は勉強に由る事なれば
天才を恃まずして人力を尽すも可きなり

法國の葡岡孫は童子
たりし時に自鳴鐘の轉
ずるを見て木を以てよく
時に合ふ自鳴鐘を作りし
者なるが又鳴の自ら水を
飲み翼を發して游泳する
機器を造り精妙人を駭
せり後に其國の納緞製作
場の監督となり世に類なき
花紬を織る器械を
造り出せしとなり

西洋の學者世界を空氣の海と號けり海河の物一ッとして水の浸さゞるハなく陸地の物一ッとして空氣の包まざるハなし氣を扇て風の起るハ水を擾して波立と同じ人の呼吸するも空氣を吸ひ空氣を吐く者にて魚の水を呑み水を吐くと異ることなし魚ハ水を離るれハ死し人ハ空氣を離るれバ死す空氣なけれバ禽獸草木も生を保事能わず空氣ハ色なき物の如くなれども其性青し天の青きハ空氣の重なる色也水も深き淵ハ青くこれを器に盛れハ色なきが如し

杉の用
杉ハ板ニ割り柱ニ切り
丸太ニもちひ貫となし
屋根板ニへぎ杉皮をむき
葉ハ干し碓ニて搗き
粉となして抹香を拵へ
線香を製す細き
枝ハもちひ薪と
なし実ニ廢る
ところなき
良材なり
應需 曜齋國輝画圖
屋根板
杉の葉ハ新酒の印
抹香をつく
線香
和久産巣日尊
六
桜齋房種筆

茶植附の圖
本朝茶ハ上古よりありしと云ひ又嵯峨天皇茶を愛たまふと
日本後紀ニ見えたり然れども葉上僧正栄西宋より
其種を持来り建仁年間筑前の背振山ニ
植しを始めとなし夫より山城の宇治伊勢の川上
駿河の阿倍茶など追々名高く方今ニいたり
国中大概之を作り外国ニても羨を慕ふ
所ありて実ニ我朝の名産なるものなり
〇茶の実を蒔くところ
〇輪ニ蒔くところ
〇蒔たる冬霜除をしたるところ
〇茶の木の芽生ニ肥しするところの
糞ハ干鰯油の粕などを善しとす
曜齋國輝画圖
茶摘の圖
茶ハ種を蒔く時より三四年めニ
摘を始む美茶ハ四月の
節ニ入り摘を出し
一番芽二番芽とあり
三番摘ハ番茶ニ製す
最上の品ハ二葉三葉
上の品ハ五葉六葉
ぐらゐ幹ニ付て摘む
又ところニ因り
木の根より
刈とりて
安茶ニ製するあり
是を刈茶と云
圖の如し
應需
曜齋國輝画圖

杦の苗仕立方
杉の苗床の圖
芽生のところ
種を蒔くところ
春彼岸のころ種を蒔き
入梅すぎて芽を出し
二三寸に伸る
二年目にて一尺余に成る
三年めの春牛房根を
畦を作り
植付ければ秋にいたり
三尺ほどに生育なり
杦の苗二年目
苗の牛房根を切るところ
應需
國輝画
茶を製する圖
摘取りたる茶の
葉を蒸籠に入れ蒸し
板の上にて揉を
敷紙の上へ干し
焙炉に掛け
仕揚るなり
又生茶を直に
熱湯へ入れて
淪るもあり
然れども蒸すを
以て最上の
製とす
○蒸籠の中にて茶を蒸す
○敷紙の上にて干して茶を乾かす
○焙炉にて茶をあぶる
○板にて茶を揉む
曜齋國輝画

争闘を好む童男

踈漏より出来する怪我

勉強する童男

勉強する家内
出精する家内